
illish

黎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

illish

【Zマーク】

Z5382BA

【作者名】

黎

【あらすじ】

最後の方はグロになる予定です。

絶望と再生、そして再びの死モノをモチーフに執筆中です。

最近死にモノがおおくなつてきました。

プロローグ

手当たり次第に触れるものを壊していた。
手当たり次第、触れたものは壊れたから。

壊そうとしてもしなくて、どちらにせよ大事なものが壊れた。
昔は自分が呪われているんだと思っていた。自分を守るための言い訳だったんだろうけど、それに気づく度にまた壊れる。自分の弱さに気づくのが怖くて、周りを傷つけた。
壊れるなら壊してしまえ、と。

そんな俺が、今、郁理を守りたいと思っている。
夏の屋台とか、何かを焼いたような匂いから、俺は何故かいつも秋を連想する。

土や葉の薰りが煙たさと絡み合つ。この空気は必ず俺に璃夕を思わすものだ。傷口に沁みるように、見るたびにアイツの泣き顔と郁理の無表情な顔が交錯する。

歩く先に広がる、茶や赤。ときどき黄色が覗くその風景は、アイツと出会った頃に酷く似ていた。

俺は郁理の手を引きながら、僅かにある隙間を歩いていた。小さい手が、離すまじと俺の手を握っている。

：表情と行動が矛盾している。そんなところもアイツに似ている。
そう思うあたり、俺はアイツのことが忘れられないのだろう。

そんな俺が、今、郁理を守ると決心している。

例えば、今、目の前にネコの死体があつたとして。それについて思案したとして、俺には何の感情も沸き上がつてこない。感情が欠落していると言わればしているのかもしれないが、俺には喜びも悲しみも感じるあたり、そうとは言わなさそうだ。じゃあ何故、俺はただ、その死体を見下ろすだけなのかというと、何もできないからだ。

俺がそこで何か手を加えたとして、状況は改善されない。触れたところで、周りの人間はウイルスだのなんの言われて鬱陶しいだけだ。

要約しよう。理由としては、俺に何かしらの利益は無いから、だ。俺が思うに、人は事柄から情報を得、利益と称している。それはつまり、俺はネコの死体から何も得られないと思った、ということだろう。

「さわっていい？」

「ダメだよ」

郁理は頷いて、しゃがんで猫の毛並みを眺める。

灰色のコンクリートに横たわる力無い躯。その瞳の色はわからなり。

この猫は死の間際、何を見ていたのか。

この猫の世界は、どんな色をしていたのか。
唐突に郁理が呟いた。

「ねこ」

「ん？」

「寒そう」

端的に続けた後、今度は顔を見つめ始めた。

「…そうだね」

もう雪の季節だ。真昼にしても、暖かいとは言い難い。

首元を覆つマフラーを巻き直す。数秒冷たい空気に晒されたが、何故か心地よかつた。

白は好きではない。寧ろ嫌いだ。

だけど、今までマフラーを買い換えたことがない。何もしないままずっと使っている。

初めに見たときは雪のように白かったのだが、もう色褪せている。今日も今日とて、郁理は無表情である。だが興味の範囲は知れず、こういったこともよくあることだ。

物珍しいのかそうではないのか。

郁理は結局30分もしゃがみ込み、やっと立ち上がったと思ったら、俺が持っていた花をねだり、亡骸の横に供えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5382ba/>

illish

2012年1月14日21時52分発行